

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第970号 平成27年7月27日

## 103歳になって分かった事

人生80年時代を迎えた我が国では、70代、80代の人が私の周りに沢山いらっしゃいますし、100歳以上の方々も今では全国に5万人を超えているという事ですから、決して珍しい事ではなくなりました。それでも、100歳を超えてなお現役で活躍をされているというのは驚異的で、そうそういらっしゃるものではありません。

100歳を超えてなお現役で活躍されているといえは、聖路加病院の日野原重明先生が有名ですが、美術家の篠田桃紅氏もまた、今年の3月28日に満102歳になりながら、今も、東京南青山のアトリエで日々創作活動を行っていらっしゃるようで、驚愕に値すると思います。

篠田桃紅氏は、1913年（大正2年）、中国の大連に生まれ、5歳頃から父に書の手ほどきを受け、24歳で書家として独立。墨を用いた抽象表現者として注目を集め、戦後間もない頃に渡米して開催した個展は高い評価を受けています。米国には2年間滞在し、帰国後は今日まで、日々旺盛な創作活動を続けており、彼女の作品は、大英博物館やメトロポリタン美術館、ボストン美術館等世界各地の有名な美術館や公共施設に収蔵されており、北海道においても、北海道立函館美術館に彼女の作品が収蔵されています。

私が篠田氏について驚くのは、100歳を超えてなお芸術家として現役で創作活動をされているという事だけではありません。むしろ、功成り名を遂げた美術界の大御所であるにもかかわらず、今もって挑戦者のような貪欲さを失わずに創作活動を続けているという事にあり、その旺盛な創作意欲の源は、「自由への憧憬」と「決まり事への反発」にあるのではないかと私には思えます。

篠田氏は、書道の団体や美術の団体に属せずに独自の創作活動を続けて来ました。彼女は、24歳で独立し書道を教え始めたころの事を思い「そのころは平安時代の名書を写すのが常道でした。でも自分の線が引きたくなった。川の字は3本線。でも無数に線を引いてもいいんじゃないの。そんな思いがわき起こって来た。造形でもそうでした。約束事に縛られずに思うままに書きたい。自由に由る生き方の出発点でした」と述べています（5月9日付日本経済新聞から）。

書家として独立した篠田氏は、決して順風満帆だった訳ではないようで、彼女の

作品に対しては「才気煥発だけど根っこがない」と酷評された時代もあったようです。そうした世間の評価に対して、彼女は「私の根っこは私にあると信じていた（5月9日付日本経済新聞から）」といますが、その強さは、幼い頃から軸や書画、古典等膨大な作品に接し、そこから多くの影響を受け、感動を与えられて来たという確信にあります。自分の歩んで来た道に自信と確信があったからこそ、世の中の決まりごとに敢然と挑戦者で在り続けたのだと思います。

篠田氏は「常識を軽んじる訳ではありませんが、常識からは何も生まれない。創造とは無縁です。常識はね、繰り返しなので安住出来る。何かに挑んで新しいものを作り出す力にはならないのです」と述べていますが、100歳を超えた方とは思えない凛とした姿です。

さて、篠田氏は今年の4月に「103歳になってわかったこと」という本を上梓されました。103歳にもなって分かった事というのは何だろうと、興味を引かれ本を手にしてみました。

100歳を超えた人のいう事は、全てがなかなか哲学的です。

100歳を過ぎた篠田氏は、「体の半分はもうあの世にいて、過去も未来も俯瞰するようになる」と書いています。「身体の半分があの世界にいる」という感覚は、少しは分かる気がします。100歳まで生きられるとは到底思っていない私には、「過去も未来も俯瞰する」という心境には程遠いものがあります。

私の周りには、70歳、80歳の方が沢山いて、そういう人の生きざまは、私自身触発されるところも多いのですが、流石に100歳を超えるとそうはいかないらしく、篠田氏は「100歳を過ぎると、前例は少なく、お手本もありません。全部、自分で創造して生きて行かなければならない。年をとるということは、クリエイトするということです。作品を作るよりずっと大変です。」と述べています。勿論、それは慨嘆しているのではなく、その大変さを楽しんでいるところが、並みの超高齢者ではありません。

結局のところ篠田氏がいわれるように「人の領域ではない事に思いを巡らせても真理に近づく事は出来ません。それなら私は一切を考えず、毎日を自然体で生きるよう心掛けるだけです」という所に落ち着くのかも知れません。でも考えてみてください。自然体で生きるという事程大変な事はありません。

（塾頭 吉田洋一）